

「意外と気づかない眼瞼下垂の諸症状：肩こり、頭痛、額の皺など」

大阪市立総合医療センター 形成外科 山口 憲昭

◆眼瞼下垂症とは？

眼瞼下垂症とは、読んで字のごとく、まぶた（眼瞼）が下がっている（下垂）という病気です。この病気には、生まれた時から目が開きにくい**先天性眼瞼下垂症**や、大人になってから加齢の影響や、コンタクトレンズの影響で生じる**腱膜性眼瞼下垂症**、神経の病気が原因でおきる**神経性眼瞼下垂**などがあります。当院の小児形成外科・形成外科では、これらすべての病気に対応しておりますが、今回の市民医学講座では、**腱膜性眼瞼下垂症**のお話をします。かつては、**老人性眼瞼下垂**といわれていたものですが、最近では、コンタクトレンズの普及やアレルギー疾患などのために、30歳代、40歳代でも生じる病気となっています。そのため、呼び名として、「老人性」というのは、不適切であるとして、**腱膜性眼瞼下垂症**と呼ばれるようになりました。では、その「**腱膜**」とはどのようなものを指すのでしょうか。

◆腱膜性眼瞼下垂の「腱膜」とは？

目を開ける仕組みは実は複雑なメカニズムで調整されています。目を開ける筋肉である「眼瞼挙筋」、その力を伝える「挙筋腱膜」、目の開き具合を監視している「ミュラー筋」、更に目を開けるのを手助けしているおでこの筋肉「前頭筋」、これらが複雑に機能して我々の目は開いています。

このメカニズムの中で一番緩みやすいもの、それが「**挙筋腱膜**」というわずか0.4mmの腱膜です。まさにティッシュペーパーのような組織が目を開ける力を伝える要となっています。

この膜が、重力（加齢）の影響や、コンタクトレンズの操作に伴う物理的な刺激によって伸びてしまったり、外れてしまったりするものが**腱膜性眼瞼下垂症**です。白内障の手術などの後に生じる眼瞼下垂もこの分類になります。

◆わかりにくい初期症状

私は目が開いているから大丈夫、と思われている方も多くおられますが、実は眼瞼下垂症の初期症状はわかりにくく、ご自身でも気づかれていない方がほとんどです。たとえば、「**おでこの皺**」です。目はしっかり開いている方でも、おでこの皺が深くなっている方は、すでに眼瞼下垂が生じ始めています。これは目を開ける補助をしている、おでこの筋肉（前頭筋）が無意識に緊張して、無理やり目を開けている状態です。そのため、おでこを手で抑えてしまうと目を開けることができなくなってしまいます。また、「**肩こり**」、「**不眠**」、「**頭痛**」といった、一見眼瞼下垂と関係のなさそうな症状も、眼瞼下垂の初期症状であることがあります。

◆腱膜性眼瞼下垂の治療法

このような早期の症状の方から、ほぼ目が開かなくなってしまった重度の眼瞼下垂の方まで、局所麻酔による手術で治療することができます。手術時間は、内容にもよりますが片目で約1時間程度です。外来での手術、入院での手術いずれも対応が可能です。術後の腫れがしばらくありますが、2-3週間もすると腫れも引きます。二重のラインからの切開ですので、キズも比較的目立たず、日常生活が楽になった、10歳若返ったなどと喜んでいただける手術でもあります。

ご本人、ご家族、お知り合いなどに「おでこの皺」が深い方、「目がなんとなく重たい」という方がおられれば、眼瞼下垂症の可能性があります。今回のお話の中で、供覧したお写真と目の具合を見比べていただき、「あれっ」とお気づきの方は、お気軽に形成外科を受診してください。

当院を受診される場合は、「形成外科 眼瞼外来」宛ての紹介状をご持参の上、
地域医療連絡室 TEL06-6929-3643 にてご予約をおとりください。